

1月26日は文化財防火デー

過去の災害に学んで、みんなで文化財を守りましょう。

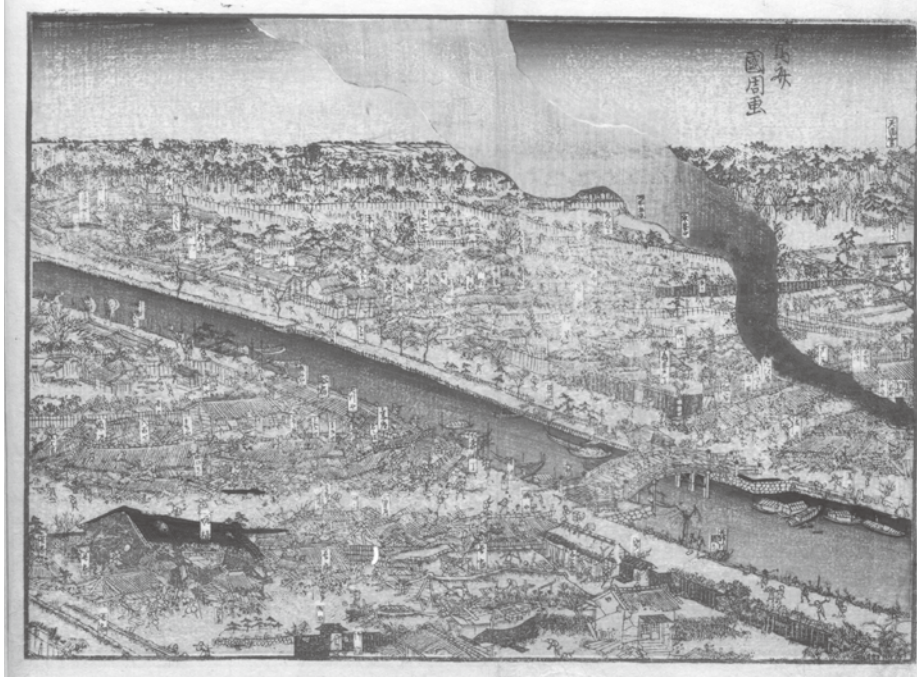


図1「亀戸天神橋通 横十間川筋柳島之図」(右側)『安政見聞誌 上』(江東区教育委員会蔵)掲載
安政江戸地震での被害の様子。現在の墨田区錦糸公園付近から亀戸(北東方向)を臨む。
中央を流れるのが横十間川、右奥に亀戸天神社、描かれている橋は天神橋。



図2 深川地区の被害状況
『安政見聞誌 上』(江東区教育委員会蔵)掲載
地震による深川地区での建物倒壊と火災の様子。

そこで次
ページでは、
幕末の東京低
地を襲い、昨
年11月で発災
から170年
を迎えた安政
江戸地震につ
いて、ご紹介
します。

毎年1月26日は「文化財防火デー」です。年末年始が近づく、駅や公共施設、寺社に掲示されたポスターを見かけたことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

文化財防火デーは昭和30年(1955)に文化財保護の普及啓発事業の一環として、現在の文化庁と消防庁によって制定されました。

全国各地で日常のように災害が発生している昨今、過去の災害を学ぶことは、文化財だけにとどまらない、日常の暮らしを守る一助となるはずです。

震災や風水害、戦災によって、多くの文化財が失われてきた江東区にとって、現存している文化財は、江東区の歴史・文化を継承していくうえで貴重な存在です。

この日は全国各地で、文化財を対象とした消防演習が行われます。江東区でも昨年は、令和5年(2023)に潮見に移築復原された「旧洪沢家住宅」で消防演習が実施されました。

火災が発生した日であることと、一年のうちでも火災の発生しやすい時期であることが理由です。

「保護法」制定(昭和25年)の契機となった、昭和24年に発生した法隆寺金堂の火災が発生した日であることと、一年のうちでも火災の発生しやすい時期であることが理由です。

下町文化



KOTO City In TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO.
312
2026.1.16

発行

江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<https://www.city.koto.lg.jp/>

○1月26日は文化財防火デー

○江東歴史紀行

安政江戸地震と江東

○江戸時代の日用品②
寝具「箱枕」について

○古写真の中の江東
波除碑と標柱・立札

○シリーズ 文化財と向き合う
江東区域の宝篋印塔

○小・中学生版 文化財を考える
文化財を調べてみよう

安政江戸地震と江東

はじめに

嘉永6年（1853）のペリー来航以降、いわゆる「幕末」へと時代が突入して行く中の江戸を襲ったのが安政江戸地震（以下、江戸地震という）です。そして、この地震は元禄16年（1703）の元禄地震以来、約150年ぶりに江戸を襲った大地震でした。

発災

江戸地震の発生は、安政2年10月2日（1855年11月11日）の、夜四ツ時（午後10時頃）に発生しました。震央は東京湾北部から江東区付近、地震の規模はマグニチュード7程度と考えられています。震源の深さについては、発生のメカニズムにより諸説あり、定まっています。

この地震は明治18年（1885）に全国的な地震観測が開始される前の「歴史地震」に含まれますが、江戸時代末期のため比較的よく記録が残っています。その中には『江戸名所図会』で著名な斎藤月岑の『安政乙卯武江地動之記』も含まれます。

これらを基にした分析では、震源に近い江戸市の中のうち、隅田川以東の東

京低地では、現在の震度で震度6強程度の強い揺れだったとみられています。一方で、西側の武蔵野台地上に位置する山の地域では震度5弱・5強程度と震度に大きな違いがありました。

被害の概要

江戸地震による人的・物的被害の合計は、町方や武家、社寺などで支配が分かれ、横断した調査がないため正確な数字は不明です。

町方では、幕府による調査が地震直後の10月6日と同月中旬の2回行われ、2回目の調査では死者約4300人、負傷者約2800人となっています。大名・旗本らの武家方の死者については各記録から約2600人と考えられており、これに社寺や町方以外の被害も加えると死者は7000人以上、1万人程度とする説もあります。

建造物の被害は、町方で家屋約1万4000軒、長屋約1700棟、土蔵約1400軒とされています。また、地震に伴い揺れの大きかった地域を中心に、江戸市中の30数か所で大火し約1.5km²が延焼したとされますが、当日は微風だったこともあり、大正12年（1923）の関東大震災のような大火とはなりませんでした。

江東区内の被害概要

深川一帯の町々は、江戸町方支配に

おける名主組合のうち十七番組に属していました。町方での被害調査（2回目）で、十七番組は死者1186人（男519人・女667人）、負傷者820人（男461人・女359人）、潰家4903軒、潰土蔵785軒となっていました。

江戸地震の30年ほど前に行われた地誌調査による『町方書上』での深川一帯の家数・人口は約1万1600軒、約4万6000人となっています。単純比較はできませんが、およそ4割以上の建物が倒壊したとみられ、損害を受けた建物はこれ以上であったと思われます。また、土蔵の被害も江戸町方全体の半数以上が深川地域で記録されています。一方で、城東地域については、記録がなく被害の概要については不明です。

深川地域の被害状況①

ここからは区内各地の被害状況をご紹介しますが、紙面の関係上すべてをご紹介できない点をご了承ください。

小名木川の北側に位置する現在の新たな橋・森下・常盤一帯では、町屋・武家屋敷・社寺の倒壊に加えて複数箇所で大規模な火災が発生、「新大橋向御船蔵前町、六間堀、森下町辺焼失 凡長七町余（約760m）、巾平均二町半程（270m）」^①が被害を受けました。これに

より、新大橋の東詰にあった幕府の蔵も倒壊と火災の延焼による被害を受け、高橋近辺では大名屋敷が火災の被害を受けています。一方で深川神明宮は「六間堀神明宮火中にして本社拝殿とも恙なし。一の鳥居焼ける、二の鳥居残る。」^①と周囲が火災の中、一の鳥居以外は被害を免れています。

大横川の東側、現在の猿江・住吉・毛利では、「猿江の辺、寺院町屋其外潰損多し。重願寺本堂無事、鐘楼潰玄関方丈大に傾く。摩利支天社少破、泉養寺本堂鐘楼等潰」^①とあり、建物の被害が記録されています。

深川地域の被害状況②

小名木川と仙台堀川の間に位置する現在の清澄・白河・三好・平野では、隅田川や小名木川に面した清住町や海辺大工町、明暦の大火（明暦3年（1657）以降に形成された深川寺町では「海辺大工町より清住町、新寺辺潰多し」^②とあります。そして、寺町の寺院は「寺町通り、諸宗寺院大破損、浄心寺本堂大破、寺内三ヶ寺并中門・表門・手水舎共潰、同表口題目石倒れる、同霊かん寺（靈巖寺）表門倒、本堂・寺内共大破、同所本誓寺大破損」^③とあり、各寺院では本堂こそ倒壊を免れますが、支院や塔頭、境内の建造物や石造物に倒壊被害が出ました。

寺町ではこのほか雲光院や法禪寺に被害がありました。

なお、現在は清澄庭園となっている久世大和守（関宿藩）の下屋敷では、長屋や土蔵が破損しました。さらに、隅田川沿いにあった霊雲院の前では地割れが記録されています。

深川地域の被害状況③

永代橋東側の、現在の永代・佐賀・福住あたりでは、「永代橋を渡り深川に至れば、地震いよいよつよきさなり。そのうち佐賀町、熊井町、小川町、黒江町、八幡町迄の左右は、総潰れのうち、所により出火し皆焼と成しゆえ、土蔵も大てい残りなく焼失して、見もと哀なり。」^④とあるほか、斎藤月岑も、相川町の通りでは地震の揺れとともに家屋が路地へ倒れかかり、下敷きになったまま逃げ場を失い焼死したものが少なくないと聞いた、と凄惨な状況を記録しています。

永代寺門前周辺の現在の門前仲町・深川・冬木・牡丹・古石場では、「永代寺八幡宮無別条、別当永代寺大凡潰る」^①とあり、富岡八幡宮は本殿拝殿こそ無事だったものの、永代寺の本堂含む両寺社の境内は、多くの建物や石造物が大破しています。さらに富岡八幡宮の東隣にあった深川三十三間堂では、堂宇の3分の2が倒壊しました。

また、火災被害も大きく、永代橋東詰付近の相川町で発生した火災は、現在の永代通りに沿って燃え広がり、永代寺の門前までの長さ10町余（約1100m）、巾平均3町程（約330m）が焼失しました。

このほか、現在の深川2丁目にある、明暦の大火以前に形成された寺町ではほとんどの寺院が大破、現在の牡丹・古石場でも大名屋敷が大破しています。

深川地域の被害状況④

現在の木場・東陽でも、多くの建物が大破する一方で、当時の海岸線に面した洲崎弁財天は被害を免れました。現在の東陽6・7丁目あたりの六万坪と呼ばれた埋立地では大名屋敷や民家が大破損し、崩れ家が多いと記録が残されています。また、木場では小路に地割れが生じたとあります。

現在の千田・千石・海辺・扇橋・石島では、一橋家の抱屋敷や小名木川に面する大名屋敷、大横川に面する地域で、大名屋敷や民家が大破損し、崩れ家が多いと記録されています。

城東地域の被害状況

現在の亀戸では「亀戸天神社無事、境内大破損、同所門前丁一二焼る。（中略）此辺小火所々にあり。猶又近辺小屋敷民家崩家潰家多く、凡そ焼失同様

の所多し。」^⑤とあり、亀戸天神社では境内の鳥居や末社が破損しましたが、本殿は無事でした。さらに、横十間川沿いの龍眼寺（萩寺）、長寿寺では本堂が倒壊する被害がありました。

現在の大島では、浮世絵の題材としても有名な羅漢寺の三匠堂（さんそうどう）が破損したものの倒壊は免れました。

現在の砂町一帯では、「八右衛門新田民家多崩る。同砂村亀高太塚逆井元八幡小名木川筋迄の内崩れ家多し」^⑤とあり、砂町一帯でも建物の倒壊被害が記録されています。



「亀戸天神社内西口華表図」
『安政見聞誌 下』（江東区教育委員会蔵）
掲載 地震により亀戸天神社西口の鳥居が倒壊した様子。

救恤活動

江戸の下町を中心に大きな被害を出した江戸地震に対して幕府は、現在の避難所に相当する「お救い小屋」を設置します。設置場所は、浅草雷門前・深川海辺大工町・幸橋御門外・上野山下火徐地・深川永代寺境内の5か所で、被害の大きかった深川では、2か所が設置されています。お救い小屋は、上野と深川（2か所）を除いて12月6日

まで運用され、その後、上野と海辺大工町が順次閉鎖、最後の永代寺が翌年1月26日まで運用されました。

お救い小屋に加えて、被災者の食事確保のため、10月3日から19日まで、上野大門町・向柳原町会所・牛込神楽坂穴八幡御旅所、芝神明宮境内、深川永代寺に炊き出し所が設置され、各町へ握り飯の配給を実施しました。

そして、江戸地震では江戸市中の裕福な町人を中心に、現在の義援金に相当する施行が行われました。施行を行った町人には、甚大な被害を受けた佐賀町の住人や、木材材木角の仲買人も含まれています。

おわりに

東京都は令和4年5月、首都直下地震の発生確率は今後30年間で70%と発表しました。

過去の災害を通して、被害状況だけでなく、江戸時代にはすでに、公助に加えて共助の精神が庶民の間に築かれていたことを知っていただければ幸いです。

※引用文献

- ① 斎藤月岑『安政乙卯武江地動之記』
- ② 畑銀鷄『時雨廻袖』
- ③ 『御江戸大地震大破并出火類焼場等書上之写』
- ④ 著者不明『なるの後見草』
- ⑤ 仮名垣魯文『安政見聞誌』

（文化財専門員 勝田真幸）

江戸時代の日用品② 寝具「箱枕」について

深川江戸資料館の再現展示にある家屋には、現代では見かけない道具や日用品が展示されています。そのため、若い世代の来館者から「これは何に使うのですか？」と尋ねられることがよくあります。今回は、江戸時代の寝具「箱枕」についてご紹介いたします。



長屋の箱枕

箱枕の構造

日本の古代では、草を束ねた「草枕」、木で作られた「木枕」、石で作られた「石枕」など、様々な枕が使われていました。枕の形や素材は、使う人の身分や生活習慣に応じて変化してきました。

た。

「箱枕」とは、箱状の台座の上に、両端を結んだ俵形の小さな枕「括枕」が載せられている枕です。括枕の中には稗やそば殻、もみ殻などが詰められています。なお、当館にある箱枕はもみ殻です。また、括枕が台座の上で動かないよう、紙紐（元結）でしっかりと結び付けられています。

箱枕の使い方

括枕を含む箱枕の高さは約15センチあり、現代の枕よりもやや高めです。これは就寝中に鬚や結髪が崩れないように作られているためです。当時は結髪を解かず、頭ではなく首筋に枕を当てて眠っていました。

また、髪油が括枕に付かないように、括枕には枕当て（または枕紙）が巻かれています。

箱枕の台座の材質と形

台座の材質には、桑や桐、樺などの木材が使われており、婚礼道具として、漆塗りが施された箱枕もありました。

当館の長屋にある箱枕の台座は、「安土形」と呼ばれる形をしています。その名称は、弓道での背後に築かれる土台「安土」に形が似ていることに由来するとされています。

「安土形」の箱枕には、台座の底部が安定している「平底形」と、寝返りが打ちやすいよう底面を反らせた「船底形」といった形が見られます。

健康と寝心地を考えた枕の高さ

『雲錦随筆』をはじめとする江戸時代の随筆には、「寿命三寸、楽四寸」という言葉が見られます。これは健康によい枕の高さは三寸（約9センチ）、寝心地がよく髪型も崩れにくい高さは四寸（約12センチ）とする考え方です。箱枕の高さには、使いやすさと健康のバランスが意識されていたことが想像できます。

箱枕の使い心地

明治時代に来日し、大森貝塚の発見者として知られるアメリカの動物学者エドワード・S・モース（1838～1925）は、自身の日記の中で箱枕について次のように記しています。

「日本の枕というのは奇妙な代物で、一寸見ると如何にも使い難くそうであるが、而し私は二時間の睡眠にこれを使用して見て、これはいいと思った。只、馴れぬ人が一晩中使用すると頸に痙攣が起る。この枕は特殊な方法で結った頭髮に適するために、出来たものである。」（『日本その日その日』より）



為永春水『春色梅暦』(部分拡大)
(国立国会図書館デジタルコレクション)
箱枕を使う女性が描かれています。

暮らしを伝える箱枕

明治4年（1871）に明治政府が公布した「散髪脱刀令（断髮令）」を受け、鬚を結う男性は次第に姿を消していきました。その一方で、日本髪を結う女性たちによって、昭和の初め頃まで箱枕は日常的に使われていました。現代でも完全に姿を消したわけではなく、日本髪を結う舞妓などが就寝時に箱枕を使っています。

このように、箱枕は単なる寝具ではなく、江戸時代の人々の暮らし方を今に語りかける資料といえます。当館の展示を通して、在りし日の江戸の暮らしに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

※参考文献

白崎繁仁『枕の博物誌』

矢野憲一『ものと人間の文化史81枕』
(深川江戸資料館 伊藤友香子)

古写真の中の江東 波除碑と標柱・立札

江東区では、文化財の保護および周知を目的に、区史跡および指定文化財の説明板を設置しています。また、区内には東京都による都指定文化財の説明板も設置されています。

今回、洲崎神社（木場6―13―13）所在の「波除碑」およびその傍らに建てられていた説明板の前身にあたる標柱・立札（木製）についてご紹介します。

波除碑について

波除碑は、寛政3年（1791）9月の大雨により高潮被害を受けた深川洲崎の沿岸部のうち、同6年12月に空地とされた土地の両端にあたる洲崎神社と東富橋南詰通り（大正14年・

1925）に現所在地である平久橋西の橋台地に移転）に1基ずつ幕府が建立したものです。洲崎神社の碑は、『江戸名所図会』（天保7年・1836）には同社参道入口の外（西）に描かれ、「波除碑」の注記があります。

波除碑2基は、大正13年2月に「津浪警告碑」として東京府の仮指定を受け、昭和17年（1942）9月に仮指定が解除され史蹟となります。戦後の昭和27年4月に都史跡、同30年3月に旧跡、同51年6月に郷土資料（金石文等）、同年7月に有形民俗文化財、同56年3月に歴史資料というように、文化財の種別がたびたび変更となりました。なお、昭和51年の種別変更時に、「波除

碑」に名称の変更がなされました。江東区では、昭和56年に有形文化財（歴史資料）に登録しました。碑は、大正12年の関東大震災、昭和20年の東京大空襲により2基ともに被災・倒壊し原形を留めていませんが、修復がなされながら現在まで遺されています。

波除碑と標柱・立札の変遷について

写真1は『東京市史蹟名勝天然紀念物写真帖』に掲載の震災以前に撮影された写真で、洲崎神社参道入口外にある碑を、北西から写したものです。碑の損傷はほぼなく、右手（南）にある立札には「寛政年間／津浪警告之碑／東京府」と書かれています。『東京府史蹟』（洪洋社、大正8年）によれば、大正4年11月以降に東京府内の史蹟名勝に順次「標識」を設置し、同7年10月に「史的紀念物天然紀念物勝地保存心得」を公布、同8年2月に台帳の作成に着手したとの記述があります。同書には67か所の史蹟名勝が掲載され、これに波除碑も含まれています。よって、写真1の立札が「標識」にあたるとみら

れます。

写真2は『史蹟名勝天然紀念物概観』に掲載の震災以降である大正15年頃撮影の写真で、南西から写しています。碑は震災時に折れたためか、碑の上半部が柵の中に設置されています。碑の脇（南）に立札が設置され、「指定史蹟／津浪警告碑／」「」／東京府」と読めます。

写真3は昭和30年頃に碑の南から撮影されたものです。碑は戦後、境内に移され修復されたようで、碑の左（西）側に銘文が記された立札と「津浪警告之碑」と墨書きされた標柱が見えます。写真4は現在の写真で、南西から撮影したものです。平成26年（2014）度に修復された碑の前（南）には、都教育委員会による文化財説明板（平成23年板面更新）と、区による「名所旧跡標柱」（昭和33年設置・石製）が並び、碑の左（西）に木製の標柱が見えます。これは、写真3に写る標柱と同一のものと考えられます。

波除碑の変遷を写真から見ていく中で、東京府（都）による史蹟（文化財）保護の過程を知るとともに、神社および地域の歴史資料として大切に守られてきたことが分かります。

＊ ＊ ＊

（文化財主任専門員 野本賢二）

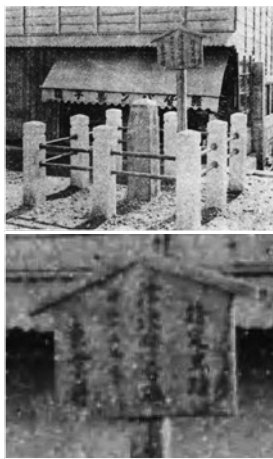


写真2 大正15年頃の波除碑と立札
『史蹟名勝天然紀念物概観』
（東京市、大正15年）
国立国会図書館デジタルコレクション

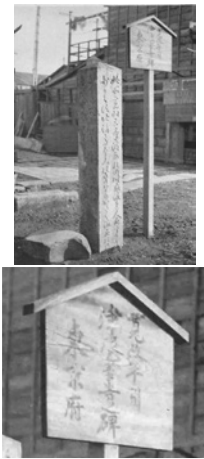


写真1 大正12年9月以前の波除碑と立札
（『東京市史蹟名勝天然紀念物写真帖』
第1輯（東京市、大正11年）
国立国会図書館デジタルコレクション



写真3 昭和30年頃の波除碑と標柱・立札
左：標柱（部分）／中央：立札（部分）／右：全体



写真4 現在の波除碑と文化財説明板、石製・木製標柱
令和7年12月撮影
とみらるものにあたる立札が「標識」

江東区域の宝篋印塔

はじめに「宝篋印塔とは」

宝篋印塔は、塔婆の一形式で、日本では中世以降に主に石造塔に用いられました。その名称は、塔内部に『宝篋印陀羅尼經』（一切如来の全身舍利の功德を集めた呪。四十句からなる。）が納められたことに由来します。

江東区内には、9基現存しており、それぞれ文化財に登録（8基・指定（1基）されています（表）。今回はこれらをご紹介します。また、宝篋印塔を通じて、これらが造立された意味や地域との関わり、さらに、現代社会の現象などについても考えてみたいと思います。

宝篋印塔の構造

基本的に宝篋印塔は、写真1のように「相輪・笠・塔身・基礎」の4つの部材からなっています。相輪は、釈迦



写真1

の舍利（遺骨）をいれるストウパー（舍利塔）を意味します。相輪の下には、階段状の笠があり、四隅には馬耳状の隅飾が施されます。

塔身には、種子（種子字）が刻まれます。江東区の事例では、金剛界四仏が刻まれているものが多く見られます（表）。四仏とは、密教における大日如来の四方に位置する仏で、東方の阿閼如来（アウーン）、西方の阿彌陀如来（アキリク）、南方の宝生如来（アタラク）、北方の不空成就如来（アアク）が配されます。

宝篋印塔の形式

川勝政太郎氏によると、宝篋印塔は「関西形式」と「関東形式」の2形式に分類されます。大きな特徴として、関西形式では、塔身に四角の輪郭が刻まれます。基礎に区画がないか、あるいは一区だけとなるのに対し、関東形式では塔身に四角の輪郭があり、基礎は二画となります。

さらに、近世の宝篋印塔は2つの類型に分類され、近世前期にかけて追善・逆修供養を目的に造立された塔（1類型）、同中期以降をピークに「宝篋印陀羅尼經」を刻み、笠が方形降り棟の屋根となる塔（2類型）とに分けられます（『葛飾区宝篋印塔・道標調査報告』、東京都葛飾区教育委員会、

1986年）。

宝篋印塔の功德と礼拝の仕方

日本における宝篋印塔は、追善（死後の供養）や滅罪、延命、逆修（生前供養）などを目的に造立されましたが、やがて墓塔としても用いられるようになりました。『宝篋印陀羅尼經』によると、礼拝の仕方は「右繞礼拝」とさ

宝篋印塔と五輪塔

宝篋印塔と混同しがちなものに五輪塔があり、区内にも現存しています。ここでは両者の違いについて触れておきます。五輪塔は、密教から生まれ、5つの元素で宇宙が構成されるという思想（五大思想）に基づき、下から「地・水・火・風・空」から構成され、日本では11世紀中頃より造立されました。

なお、インド・中国には見られず、真言僧鑑鑒（1095〜1144）により広められたと言われており、やがて五輪塔は墓塔・供養塔として用いられました。宝篋印塔との違いは、基づく経典や思想の違いと言えます。

亀戸地域の宝篋印塔

表は、宝篋印塔の造立年を時系列でまとめたものです。これによると区内最古の宝篋印塔は、中世の永享7年（1435）の在銘がある自性院のものとなります（写真2）。自性院



写真2
（1662）は寛文2年に、本所中

之郷竹町（現墨田区）から現在地へ移転してきたため、移転したと思われる宝篋印塔も移設されたものと思われます。

続いて、寛永5年（1628）在銘の宝篋印塔が、光明寺（写真1）と龍光寺（写真3）に各1基あります。



写真3
前者は完形ですが、誰のために造

立されたのかは不明です（刻銘なし）。後者は龍光寺の中興開山頼興の供養として造立されたことが刻銘により分かります。なお、もともと龍光寺は江戸横山町（現中央区日本橋）にあり、元和2年（1616）に現在地に移転したとされています。



写真4
在銘の宝篋印塔があります（写真4）。刻銘か



写真5

ら宇都宮浄
房が先祖供
養のために
造立したこ



写真8

ました。な
お、本塔は
区の指定文

とが分かります。宝蓮寺の宝篋印塔(写真5)は、文化元年(1804)、下谷上野町(現台東区)の信方と妙心が願主として造立し、講(万人講)の講元が三田村氏であったことが刻銘から判明します。東覚寺には、明治17年(1884)の弘法大師入滅後1050年を記念して造立された宝篋印塔(写真6)があります。刻銘には、「深川富岡門前 加藤藤吉」ほか



写真6

5名の世話
人、さらに
178名の
名が刻まれ
ています。

深川地域の宝篋印塔

深川地域には、雲光院と浄心寺に宝篋印塔があります。前者は、寛永14年(1637)に、徳川家康の側室阿茶局(雲光院。1554~1637)の墓塔(写真7)として造立されました。雲光院は、天和2年(1682)に焼失した後、神田岩井町(現千代田区)



写真7

から、現
在地に移
転してき



写真9

高位の人物
であったと
推察されま
す。

おわりに

最後に、江東区の宝篋印塔を地域・時代との関わりの中で考えていきます。区内の宝篋印塔は高位の人物や僧の追善・逆修供養のために造立されたものであり、直接は地域の民衆との関わりを窺うことはできません。しかしながら、関東大震災(1923年)や戦災(1945年)の惨禍を経て、多くの文化財が失われた中で、これらの宝篋印塔が関係者や地域の人々によって保護され続けてきたことに大きな意味があると思います。

江東区内の宝篋印塔(登録・指定文化財)

文化財名称	建造年	住所	所有者	宗派	形式	分類	刻銘塔身	登録・指定年	写真No.
石造宝篋印塔 永享7年在銘	1435年3月19日	亀戸6-35-23	自性院	天台宗	関西形式		金剛界四仏	昭和56年03月31日	2
石造宝篋印塔 寛永5年在銘	1628年3月	亀戸3-42-1	光明寺	真言宗	関西形式	1類		昭和62年03月26日	1
石造宝篋印塔 寛永5年在銘	1628年3月	亀戸3-56-14	龍光寺	天台宗	関西形式	1類	金剛界四仏	昭和58年03月25日	3
石造宝篋印塔(阿茶局墓塔) 寛永14年在銘	1637年	三好2-17-14	雲光院	浄土宗	関西形式	1類	三仏	昭和56年4月10日 平成13年3月29日	7
石造宝篋印塔 寛永14年在銘	1637年4月9日				関西形式	1類		平成1年3月24日	8
石造宝篋印塔(残欠)明暦3年在銘	1657年4月3日	平野2-4-25	浄心寺	日蓮宗	関西形式	1類		昭和62年03月26日	9
石造宝篋印塔 天明8年在銘	1788年8月18日	亀戸3-43-3	普門院	真言宗	関東形式	2類	金剛界四仏	昭和60年03月26日	4
石造宝篋印塔 文化元年在銘	1804年12月	亀戸4-35-12	宝蓮寺	真言宗	関西形式	2類	金剛界四仏	昭和58年03月25日	5
石造宝篋印塔 弘法大師千五十年忌	1884年	亀戸4-24-1	東覚寺	真言宗	関東形式	2類	金剛界四仏	昭和59年03月26日	6

江戸時代、墓石は高価であり、一般の人々は容易に造立することができず、埋葬地には卒塔婆や目印となる石が個別に置かれていました。なお、「先祖代々」「〇〇家之墓」と刻まれた墓石が造立され始めたのは、明治時代以降、跡継ぎ(長男)による家の継承を前提とした「イエ制度」や「家父長制」の確立期とされています。

現代社会では葬送や墓制に対する考え方が多様化しています。少子高齢化や無縁化にもなつて墓終いや離檀が進み、葬送のあり方も大きく変化して、家族葬、直葬、樹木葬、海洋散骨等、継承者を必要としない方法が現われています。一方、宝篋印塔や五輪塔形式の墓塔を造立する人や、より独創的に古代の前方後円墳に模した合同墓に埋葬を希望する人も見られています。これらのことから、現代のような方になった歴史はさほど長いものではなく、時代時々によって変化を重ねてきたことが明らかです。

以上、文化財に向き合う(過去と対峙・対話)ことで、通時的に物事を考え、事物の本質に迫り、ひいては現代社会の事象を考える手立てとなるかと思っています。

(文化財専門員 大関直人)

文化財を調べてみよう

子安児童遊園の

小さなお堂（その二）

前号（No.

311）に
引き続いて、

子安児童遊

園（大島8

19）のお

堂の中にあ

る石について見ていきます。



図1 子安児童遊園角のお堂

これまでにわかったことは、石は基礎とその上に建つ塔から成っている、基礎に彫られた字から、江戸時代の正徳2年（1712）7月に平方村の人たちがこの石を建てたことでした。それでは塔について見てみましょう。塔を観察しよう

すぐ目に入るのは、人のような形でしよう。これを「像」と呼んでおきます。腕が左右3本ずつあり、真ん中は手を合わせています（合掌といひます）。他の手には何かを持っているようです。すりへっていてわかりにくいので、昭和30年（1955）ごろの写真も見てみましょう（図2）。

像の上げた両腕のうち、むかつて右



図2 昭和30年ごろの写真

がわの手には輪宝（仏法の象徴）、同じく左がわの手には三叉戟（三つまたのヤリ）を持っているようです。また、下ろした両腕のうち、むかつて右がわの手には弓、同じく左がわの手には矢を持っているように見えます。

次に像の頭上の左右には、雲の上に月と日が彫られています。また、足もとには3体の動物が彫られています。

調べてみよう

観察した結果をもとに調べてみると、像は「青面金剛」という神さまで、ふみつけているのは人に祟りをもたらす「邪鬼」であることがわかりました。おそろしい顔つきの青面金剛は、邪鬼の悪さをおさえ、武器によって病や災いをふせいでくれるありがたい神さまです。では、その下の動物は何でしょう。これは猿で、そのすがたから、「見ざる、言わざる、聞かざる」の「三猿」と呼ばれています。なお、日本でもっとも有名な三猿は日光東照宮のものでしよう。

よって、この塔は、青面金剛、邪鬼、

三猿から、「庚申塔」と呼ばれるものであることがわかりました。

庚申塔とはなに？

さて、人の腹の中には「三尸」という虫がいて、干支という庚申（60日に一度めぐってくる日）の夜、人が眠ってしまつと体の中からぬけ出して「天帝」という神さまにその人がした悪さを告げ口するため、天帝はその人を早く死にさせてしまつと多くの人が信じていました。そこで、長生きを願う人たちは、庚申の夜は集まって寝ずに過ごすしました。のちには、日の出や月の出を寝ずに待つてお祈りをする「日待」「月待」と結びついて、「庚申待」という行事になります。飲食をともなう楽しみでもあったようです。

このように、あることを信じ、大切に思うことを「信仰」と言います。庚申待の場合は「庚申信仰」と言うことができます。庚申塔は、庚申信仰のよりどころとして建てられたのです。

塔に彫られた青面金剛は庚申信仰の本尊（もつとも大切な神さま）としてまつられ、また猿は庚申の申からとも、三尸に告げ口されないように悪いことを見たり聞いたり言ったりしないことからなどとも言われています。そして、青面金剛の頭上にある日と月は、日待・月待信仰にかかわるものです。

庚申塔により、平方村でも庚申待がおこなわれていたという歴史を知ることがができます。

庚申堂が建てられたこと

では、庚申塔はなぜここにあるのでしょうか。遊園地には平方村の鎮守である子安稻荷神社がありました。戦災で焼けたため、昭和24年11月にまわりの四つの神社といっしょになって東大島神社（大島7-24）となり、あと地には庚申塔が残されました（図3）。

昭和51年

3月にあと
地が遊園地
の場所に
なつたとき、
庚申塔をど
うするか
について話し
合いがもた
れました。そ
のとき、庚申
塔は平方村
がここにあ
つたことを
示すもので
、庚申塔を
かたづけ
てしまつと、
大島地区の
歴史を失
うとして、
残すこと
になったの
です。



図3 昭和30年ごろの庚申塔

その後、昭和62年12月、地元の方たちが力をつくして、庚申塔を守るお堂が建てられました（図1）。今では、病氣や災いから子どもたちを守り育てる、ありがたい守護神として大切にまつられています。

（文化財主任専門員 栗原修）